八雲町育成牧場運営協議会　会議録

■日時　　令和５年１２月１２日（火）　13:30～14:30
■場所　　八雲町役場３階議員控室
■出席
運営委員　　安藤　勉、佐藤　正之、都築　岳志、都築　享子、小野　泰、
　　前川　眞由美、寺田　裕、佐藤　貴宏（渡島農業普及センター渡島北部支所地域係長）、澤村　建（北海道農業共済組合みなみ統括センター道南支所道南東部家畜診療所長）
指定管理者　株式会社青年舎
　　荻本　正マネージャー
八雲町　　岩村町長、石坂課長、上野課長補佐、髙嶋係長、角屋技師

■顛末
１.挨拶　（八雲町長　岩村　克詔）
いまだ酪農情勢は大変厳しい状況にあり、農業者は苦労されていると思う。このような状況に対し、八雲町としてもしっかりと支援していきたいと考えている。育成牧場については、運営委員の皆様と協力しながら運営を進めてまいりたい。

２.報告事項
〇令和５年度運営状況について
・収支決算見込み　（指定管理者説明）
委員）　職員費がかなり減っているが理由は。
管理者）　予算は職員３名分を計上していたが、人員が確保できず２名体制で運営したことから職員費が削減された。

・使用料内訳　（指定管理者説明）
　　委員より異議なし

・入牧状況　（指定管理者説明）
　　委員より異議なし

・委託牛増体量調べ
委員）　日増体量が昨年に比べ減少した原因は。

管理者）　７月から８月の猛暑によるヒートストレスを受けたことが様々な生理機能に影響を及ぼした。他の要因としては、草地の植生改善ができず生産性や品質が低下したことが考えられる。来年度は放牧草の植生状況を確認し、土壌分析に基づいた石灰質資材の適期散布を実施していきたい。

・委託牛疾病発生状況

委員）　昨年度同様、小型ピロプラズマ症の発生が多いが、今年度の駆虫プログラムを教えていただきたい。

管理者）　ペルタック、イベルメクチンに加え、今年度はバイチコールを使用した。家畜保健所とも相談し、入牧直後からイベルメクチンは計４回、バイチコールは乳用牛に対して７月末まで計４回、肉用牛に計３回使用した。貧血症状は昨年度より改善傾向にあった。

委員）　バイチコールの使用回数をもっと増やしたほうがいい。また、１回につき全頭バイチコール使用が基本。使用しない牛群があるのなら、牧区を共有しないような対応が必要。

委員）　今年度、肉用牛はピロプラズマ症が１頭もいなかったことから、駆虫方法は有効的だったのではないかと考える。

・事故発生状況

委員より異議なし

３．協議事項

〇令和６年度の運営について

・育成牧場使用料の改定について

委員）　現在の管理であれば使用料をあげることにも納得できる。人的要因によって管理が不十分にならないよう、今後どのような対策をしていくかうかがいたい。

管理者）　以前は従業員同士の引き継ぎ不足があったが、現在は十分な連携がとれている。２名体制の管理であったため、草地管理など至らない部分もあった。来年度より３名体制になる予定であり、より行き届いた管理ができるよう、従業員同士の連携を徹底していきたい。

委員）　今回の改定により、主に影響をうける利用者ではどの程度使用料があがるのか。

管理者）　おおまかな試算で110万円程度となる見込み。

委員）　段階的に使用料をあげていく等の対応は考えているか。

管理者）　条例に規定する利用料金の範囲内において使用料を決定することとなるため、今後社内で検討・協議し、八雲町の承認を得て決定したい。

町長）　使用料と併せ、職員の賃金についても内部で検討していただきたい。

４．その他

委員）　昨年度より入牧戸数、頭数ともに減少しているが原因は。

管理者）　農業者の離農や、預ける月齢の牛が少ない等の理由で減少している。

町長）　近年、民間による預託農家等が町内で増加し、育成牧場に預託する農業者が減少傾向にある。公の施設が民業圧迫にならないような配慮をしながら、町内の農業者の需要に応えていくことが重要であり、今後指定管理者と協議のうえ運営を続けていきたい。